

武蔵野日曜聖書講筈

洗礼のヨハネの犠牲とキリストの生命力

——マタイ伝第14章1～21節——

1993年11月21日

小池辰雄

存在そのものは死なない キリストの砕け 活ける魂 詩「時は来れり」(召団讃歌A3) キリストの生命力 常識をはるかに超えている 降参すると入れる キリストの力に与かる

【マタイ14】

1 そのころ、国守ヘロデ、イエスの噂をききて、²侍臣どもに言う『これバプテスマのヨハネなり。かれ死人の中より甦えりたり、然ればこそ此等の能力その内に働くなれ』³ヘロデ先に己が兄弟ピリポの妻ヘロデヤの為にヨハネを捕え、縛りて獄に入れたり。⁴ヨハネ、ヘロデに『かの女を納るるは宜しからず』⁵と言いに因る。⁵斯てヘロデ、ヨハネを殺さんと思えど、群衆を懼れたり。群衆ヨハネを預言者とすればなり。⁶然るにヘロデの誕生日に当り、ヘロデヤの娘その席上に舞をまいてヘロデを喜ばせられたれば、⁷ヘロデ之に何にても求むるままに与えんと誓えり。⁸娘その母に唆かされて言う『バプテスマのヨハネの首を盆に載せてここに賜われ』⁹王、憂いたれど、その誓いと席に在る者とに對して、之を与うることを命じ、¹⁰人を遣し獄にてヨハネの首を斬り、¹¹その首を盆にのせて持ち来らしめ、之を少女に与う。少女はこれを母に捧ぐ。¹²ヨハネの弟子たち来り、屍体を取りて葬り、往きてイエスに告ぐ。

¹³イエス之を聞きて人を避け、其処より舟にのりて寂しき処に往き給いしを、群衆ききて町々より徒歩にて従いゆく。¹⁴イエス出でて大なる群衆を見、これを憫みて、その病める者を医し給えり。¹⁵夕べになりたれば、弟子たち御許に來りて言う『ここは寂しき処、はや時も晩し、群衆を去らしめ、村々に往きて、己が為に食物を買わせ給え』¹⁶イエス言ひ給う『かれら往くに及ばず、汝ら之に食物を与えよ』¹⁷弟子たち言う『われらが此処にもてるは唯五つのパンと二つの魚とのみ』¹⁸イエス言ひ給う『それを我に持ちきたれ』¹⁹斯て群衆に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子たちに与え給えば、弟子たち之を群衆に与う。²⁰凡ての人、食いて飽く、裂きたる余を集めしに十二の筐に満ちたり。



21 食いし者は、女と子供とを除きて凡そ五千人なりき。

● 存在そのものは死なない

1 そのころ、国守ヘロデ、イエスの噂をきき、

「ヘロデ」はヘロデ・アンティパスで、例のヘロデ王の子供です。

2 侍臣どもに言う『これバプテスマのヨハネなり。かれ死人の中より甦えり

たり、然ればこそ此等の能力その内に働くなれ』

「バプテスマのヨハネ」はキリストの先駆者で、預言者の最後の人です。多分、エッセネ派の人で、非常に霊的な人物です。「死人の甦り」ということは旧約にも出ているので、こういうことが言えるわけです。本当の甦りをなされたのはキリストの他にいない。甦りというよりも霊生の現れです。

「死」という言葉はいくらでも出てくるけれども、私は死という言葉は嫌いだ。我々キリストの生命を受けたものは死なない。次の世界に往生する。往きて生きる。ゲエテという人も、「この地上の生涯が終われば、大自然は別な形態の自分というものを用意してくれる」

というようなことを言いました。「肉体」は亡びます。けれども、存在そのものは死なない。「魂」はキリストにあつては絶対に失せていきませんから。その烈々たる預言はエゼキエル書37章に出ています。

ヘロデはヨハネを迫害して殺した悪い奴ですから、「甦ったのだろう」なんて言った。ヨハネは遠慮なくヘロデの悪い結婚のことを批判しましたから、それを憎んでいるわけです。

3 ヘロデ先に己が兄弟ピリポの妻ヘロデヤの為にヨハネを捕え、縛りて獄に入れたり。4 ヨハネ、ヘロデに『かの女を納るるは宜しからず』と言いに因る。

「獄」というのはマケラスの牢獄です。死海の北の方のはずれにある。ヘロデヤを入れるのはけしからんと批判したものだから、ヨハネを捕まえた。自分の悪行を肯定して、批判した預言者ヨハネを殺してしまおうというわけです。ヘロデというのはもちろん暴君です。

5 斯てヘロデ、ヨハネを殺さんと思えど、群衆を懼れたり。群衆ヨハネを預言者とすればなり。6 然るにヘロデの誕生日に当り、ヘロデヤの娘その席上に舞をまいてヘロデを喜ばせられたれば、7 ヘロデ之に何にても求むるままに与えんと誓えり。

「ヘロデヤの娘」はサロメという。この娘も悪いやつだ。

8 娘その母に唆かされて言う『バプテスマのヨハネの首を盆に載せてここに賜われ』9 王、憂いたれど、その誓いと席に在る者とに対して、之を与うることを命じ、

娘も母もどちらも悪いやつだ。ヘロデはそのように誓ったから、ひるがえすわけにいな



いものだから、之を与うることを命じた。

10 人を遣し獄にてヨハネの首を斬り、¹¹その首を盆にのせて持ち来らしめ、之を少女に与う。少女はこれを母に捧ぐ。¹²ヨハネの弟子たち来り、屍体を取りて葬り、往きてイエスに告ぐ。

こういう非常にけしからんだドラマの一曲ですが、洗礼のヨハネはこの悪者のために犠牲になつたわけです。この犠牲の死をイエスは非常に悲しまれた。

13 イエス之を聞いて人を避け、其処より舟にのりて寂しき処に往き給いしを、群衆ききて町々より徒歩にて従いゆく。

「群衆ききて町々より徒歩にて従いゆく」とは、半分迷惑なはなしです。

14 イエス出でて大なる群衆を見、これを憫みて、その病める者を医し給えり。

「イエス出でて」というのは、既に寂しき処に行つて祈つてこられたそれからのことです。ヨハネの犠牲の死を悼んでキリストが祈られ、かつまた、キリストは祈られると、神さまの中に入ってしまったもの凄い力が来ていますから、それで今度は群衆をあわれんで癒したというわけです。

●キリストの碎け

「いけにえ」という犠牲は旧約から出ているわけですが、イエス・キリスト自身が大犠牲になる。キリストが碎かれる。イザヤ書53章5節に、

「彼こそはわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあとう。そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり。」(イザヤ53・5)

とある。これはキリストの預言です。我々の罪愆のために十字架に架けられることです。私が碎けと言つたのは、この

「われらの不義のために碎かれ」

という言葉からきている。十字架上でキリストが碎かれる。

北森嘉蔵さんが

「神の痛みの神学」

というのを書いた。私のは

「キリストの碎け」

です。そのことで私は北森さんと直に話し合つたことがある。福音の世界は、キリストは「神の痛み」だけではどうにもならない。キリストは碎かれた。それが贖いです。その贖いによって、十字架上でキリストの碎けによって我々の罪が碎かれた。パウロの、

「我はキリストと共に十字架せられたり」

とはそのことです。



「我もはや生くるにあらず、キリストわがうちにありて生き給うなり」
と。十字架の死をたまわると、今度は聖霊の甦りの生命、霊的な生命をいただく。その

「十字架と聖霊」

の関係をしっかりとつかまえたのはパウロです。この十字架と聖霊の関係を普通のクリスチャンはしっかりとつかんでいない。十字架と聖霊は絶対にこれを離してはいけません。

この砕けです。イザヤ書53章5節。ヨハネはそのように砕かれた。キリストの前に、十字架の犠牲の予表として、洗礼のヨハネがこの悪の力、サタンの力の下でもって砕かれた。ヨハネのこの犠牲そのものがキリストの十字架への、身をもつてした預言であるわけです。預言者の最後は、身をもつて預言した洗礼のヨハネでした。キリストがヨハネのことを、

「これより大いなる預言者はない」

と言われたのはそのことです。

歴史をみましても、本当に愛と義をもつて犠牲の死を遂げたような人たちは、これは天界で一番輝いていると私は思います。神の国で一番輝いているのはそういう人たちです。「輝く」という言葉がダニエル書の終りの方に出ている。

「さとし穎悟者は空の光輝かがやきのごとくに耀かがやかん。また衆多おおくの人を義ただしきに導ける者は星の

ごとくなりて永遠にいたらん。」(ダニエル12・3)

永遠に輝きつづける、ということですが。

犠牲的な死を遂げた人は決して単に死んだのではない。烈々たる魂は生きていますから。肉体の死なんかはどうでもいい。

●活ける魂

その魂が、

「本当に活ける魂か、魂そのものが死んでいるか」

それが問題です。青年でも魂が生きていないような青年は老人です。ところが、老人でも魂が烈々として生きている人は青年なんです、男でも女でも。キリストの福音を私たちは受けとれば、魂は烈々たらざるを得ない、光らざるを得ない。クリスチャンでくすぶっていたら、それは本ものではない。どういう事にでつくわしても、本当に心は讚美をしている。本当の魂のすがたは神讚美です。だから、讚美歌を歌うというのは非常に大事なことです。讚美歌を歌うときに、まずいのうまいのではない。魂をこめて歌っているかどうかだけ。

旧約の詩篇は讚美歌ですから。讚美歌集です。「詩篇」という訳は本当はよくない。「讚歌集」とでも訳せばよかった。「テヒリム」というのはそういう意味ですから。神讚美、「ハレルヤ」なんです。ハレルヤのものは「ハールル」という字で、

「ハールール ヤー」

とは、



「君たち、神を讃美しなさい」
という意味です。

聖書を通読することも大事なことです。ヨハネ伝ならヨハネ伝をずーっと読んでしまう。熟読ということと通読ということを並行するといひ。本当に本を読むということは熟読と通読を両方やること。熟読は分量はたくさん読めません。通読はかなり読めます。ヨハネ伝を通読すると、全体的な雰囲気や内容が、ちょうど高い山から大きな眺めをながめるように見えてくる。そういうことも非常に大事なことです。なにしろ聖書というのは聖霊の力で書かれた本だから、普通の本とは響きが違う。

普通は、研究会だの解釈だのと、そんなことばかりやっている。そんなことでは解剖学みたいで、生きているものが死んでしまう。

「わが言は靈なり、生命なり」

という。だから、「靈なり、生命なり」を分析して殺してしまつたらしようがない。

洗礼者ヨハネはヘロデヤヘロデヤという悪者によつて犠牲になつた。犠牲の死は決して空しくない。これは靈的な光をもつて光っている。

イエスはヨハネの犠牲の死を聞いて、人を避けて、舟にのつて寂しき処に往き、そこで深く祈られた。本当の悲しみを味わいながら、本当の光の世界をつかまえる。

エックハルトの言葉に

「光っている闇」

という言葉がある。そういう闇の光が光っている。サタンに負けたようで絶対に負けてない。本当の義と本当の愛は決して滅びません。サタンどもは、またサタンの子分たちは勝つたような顔をして騒ぐけれども、彼らはやがて地獄に落とされる。

そういう消息はダンテが描いています。ダンテの『神曲』はぜひ一遍お読みなさいよ。凄い魂だね、あのダンテというのは。この現世においても現実に、「地獄と煉獄と天国」が我々の生活の中にある。相対的な現実は煉獄です。しかし、その煉獄を乗り越えたところの天国をいつも持つていないとダメです。我々は、キリストを持てる者は天国体ですから。これは地獄を征服している。

●詩「時は来れり」(召団讃歌A3)

私の作った讃美歌「時は来れり」(召団讃歌A3)の一節に、

A3「時は来れり」

(1979年12月7日作 讃美歌169「きげよやひびく」の曲)

1 時は来れり

大和島根の

民の在り方

神に問われん。

とありますが、全く今の日本人の在り方は神に問われています。日本人はそんなことで



いのか、滅びるぞと。神無き民主主義なんてものはダメですから。まず学校の先生方が、幼稚園から大学にいたるまで、本当に、リンカーンが言った

「アンダー ゴット」(神の下)

にいるかということ。いろいろな民間宗教があっても、本当の高次な宗教がない。本当の仏道と本当のキリスト道を持っている人は本当に少ない。

「絶対」という言葉はいい言葉だね。絶対というのは相対を絶しているんだ。相対界を絶したところの世界。絶対界をもたなかったらダメなんです。福音の世界は絶対界ですから。

2 心おごれる 昭和元祿

混濁の世は いずこへ往くや。

3 人の心に 愛のかけなく

利をのみ追わば 崩れゆくなり。

日本人は大体、エゴイストだね。エゴイスト、エゴイズム。これは「罪」ですから。

「自分さえよければいい、幸せであればいい」

というような気持が非常に多い。とんでもない。犠牲的精神がほとんどなくなってしまった。まだ、我々が小学校、中学校で教育を受けた頃はもつと義の世界が強かったけれども、今は功利的な考えが非常に強い。

小さい人たちは、殊に小学生はもつとロマンティックにならなければダメです、夢を持たなければ。夢のないような教育の仕方したらダメなんです、今は瞬間的現実主義だから。夢のためには、やはり古典的なおとぎばなしでも何でもいいから、もつとそういうものを読ませなくてはいいかん。今の日本人の魂の在り方をみていると、何だか哀れになってしまう。だから、我々福音を受けている人たちは、一人びとりが伝道者ですよ。

「この道を伝えずんばあらず」

という、そういう使命を存在そのものが負っているわけです。遠慮なくやってください。良きマリヤとなって福音をジーツと受けとる。今度は、良きマルタとなってどんどん活動する。マリヤとマルタと両方を持たなければダメです、男でも女でも。

4 み霊たまの子らよ いかなるときも

祈りて受けよ 主のみ力を。

.....

8 生くるは伝道 いかなるときも

福音の 証人たれ!

とあるように。

●キリストの生命力

13 イエス之を聞きて人を避け、其処そこより舟ふねにのりて寂さびしき処ところに往ゆき給たまひし



を、群衆ききて町々より徒歩にて従いゆく。

「寂しき処」とは、いつもガリラヤの北の方に相違ない。祈り場から出てこられて、

14 イエス出でて大なる群衆を見、これを憫みて、

羊飼いのいない羊みたいだから、

その病める者を医し給えり。15 夕べになりたれば、弟子たち御許に來りて言う『ここは寂しき処、はや時^{おそ}も晩し、群衆を去らしめ、村々に往きて、己が為に食物を買わせ給え』

まあ、弟子の言いそうなことは大体そんなことだな。「そのような必要はない」と。

16 イエス言い給う『かれら往くに及ばず、汝ら之に食物を与えよ』17 弟子たち言う『われらが此処にもてるは唯五つのパンと二つの魚とのみ』

で、「とても間に合いません」と。

18 イエス言い給う『それを我に持ちきたれ』19 斯て群衆に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子たち^{すべ}に与え給えば、弟子たち之を群衆に与う。20 凡ての人、食いて飽く、裂きたる余を集めしに十二の筐^{かご}に満ちたり。21 食いし者は、女と子供とを除きて凡そ五千人なりき。

大変なことだ。私^{おれ}がここでいう「キリストの生命力」というのはそのことです。キリストの中には無限無量の生命力がある。だから、彼の奇蹟が現れる。奇蹟というのは何か摩訶不思議ではない。持っている生命力が無限無量だということ。キリストは創造的な力がある。大変なひとだね。

私はこのまま受けとる。その通りに。まだ聖書は書き足りないくらいです。全くキリストというひとは大変なひとです。だから、十字架にかけられようが、それで終いなんていうひとでは絶対^{ぜったい}にないわけです。犠牲の死を遂げた。それは贖いのために。キリストの死は、十字架は、その砕けは、我々の罪が十字架上で碎かれる。贖い^{あがな}いです。そして彼は新しき霊生をもつて甦^{よみが}ってくる。

金曜日の昼に十字架にかけられて、日曜の朝に復活した。日曜日はキリストの復活の日だ。永遠の生命が、驚くべき生命が顕現した日だから、ただの安息日ではないんだ。日曜日は、もの凄い生命力を——語るも聞くも同じこと——受けとるために、あなた方もやって来るわけだ。日曜を、いわゆる聖書の講義^{こうぎ}なんかをしたってしょうがない。日曜日というのは、キリストの生命力にあずかって、

「ありがとうございます、アーメン、ハレルヤ！」

という、そういう日だ。日曜は日の光のごとくになる。



●常識をはるかに超えている

五千人いようが何人いようが、キリストの生命力は無量だから、弟子たちが、

「五つのパンと二つの魚しかありませんが、とてもダメです」

と言ったら、キリストは「皆を坐らせろ」とおっしゃって、

「天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子たちに与え給えば、弟子たち之を群衆に与う。凡ての人、食いて飽く、裂きたる余を集めしに十二の筐かごに満ちたり」

と。全くいわゆる摩訶不思議だけれども、ちゃんとその通り書いてある。キリストというひとはこういうひとなんだと。我々の常識をはるかに超えている。降参しなければ、こういうところは読めない。だから、

『イエス・キリスト』と言って祈り込んだら生命力が来て、光が来てしょうがない

という祈り方をしないとね。祈り入るといのはそういうことです。キリストの中に祈り入ると、もの凄い力がくる。

「夜寝ようと思つたら、もう寝る必要がなくなってしまった」

なんて。とにかく、そういう喜びと力と生命と光の人にどんどんなって、

「来たりて見よ、キリストのところに来なさい」

と言って伝えなくては。全く大変なひとだ。旧約から新約までキリストが貫いています。イエス・キリストというひとはそういう驚くべき、端倪たんげいすべからざる存在です。

お釈迦さんはキリストにとってもかなうものか。仏教は仏教のよさはあるけれども、この生命力にはとてもかなわない。福音書というのは、そういうキリストの生命、光、愛、力に満ちあふれている。

●降参すると入れる

よく、本に

「新約の思想は」

なんて書いてあるが、福音は思想の世界ではない。思つて何になるか。

「我思うゆえに我あり」

なんてデカルトは余計なことを言った。「思う者がある」のではない。本当の「在る」のは「我生く」
ということ。生きているから在る。生きてないものは「在る」のではない。

あなた方はそれだけの烈々たる魂でいてください、どんどんなつてください。「幕屋」というのは旅をしている姿だから、楽しい旅なんだ、魂の旅だ。

キリストは片っぱしから病を癒したし、五千人にパンを与えるし。洗礼のヨハネが、

「我より後にきたる者は、我より能力ちからあり、我はその靴の紐をとるにも足らず」

「大変な方だ、比較なんかできる人ではない」



と言った。最後の預言者ヨハネは十字架の死の予表として犠牲の死をとげた。彼の死そのものが十字架の預言です。けれども、キリストはただ十字架されたのではない。贖罪のために、十字架にみずから懸かった。

「我みずからこれを棄つるなり」

と。いきなり天界に行けるひとだからね、エリヤよりも凄いんだ。福音書を読んでいたら、平伏して降参して読まなければ読めない。そうすると、その世界に入れる。

「分かるの分らないの」

ということではない。降参するとその世界に入れる。

「参りました!」

といって読むと、入れる。

「これはどういう意味だ」

なんていう、意味の世界ではないんだ。

●キリストの力に与かる

これがヨハネの犠牲の死と、キリストがヨハネのそれを受けとって、人々を癒したり、食物を与えてやっていたりした。癒すことも食物を与えることも、キリストの生命力ですから。我々はイエス・キリストの中に宿ると、キリストと一如の世界に入ると、そういう力がくる。そうしたら、その祈りの世界に入ってから、人に手を当ててごらん。相手の病なんかは癒えてしまうから。そうやってキリストの生命力を証してください。

「何か身体の調子がわるい」

と相手が言ってきたら、「そうですか」と、キリストの中に祈り入って、手をおいてやる。あなた方は誰でもできます。私はもうさんざんやってきたから。

聖書を熟読、通読すること。それはキリストの力に与かる、キリストと一つになるために読む。新約聖書というのはいくつかの生命にあふれたものだ。特に福音書はそうだ。何といつても、福音書が中心です。パウロの書翰はキリストを受けとっているところの証言だ。福音書というのはキリストそのものだから。四福音書はポケットに入れて、電車の中でもどこでも、読んでいけばその世界に入ってしまう。

特色からいうと、マタイ伝は非常に言葉の豊かなもの。マルコ伝はキリストの行為が非常にはっきりと書かれている。ルカ伝はキリストの心の面。ヨハネ伝は一番霊的なものです。パウロは劇的な構造の人です。ヨハネは渾然としている。

私が話している話の中で、あなた方はお聞きになっていて時々、電光のように閃きを受けることがありますたら、そういうことがまた非常に大事なことです。そこから、生命の泉が発するわけです。

